



日本学研究博士论丛

コミュニケーションにおける 中日の謝罪行動の比較

人际交流中的中日
道歉行为的比较研究



王 源 / 著

苑出版社

コミュニケーションにおける 中日の謝罪行動の比較

人際交流中的中日道歉行为的比较研究

王 源 著

學苑出版社

序

本书的作者王源在我所教的博士研究生当中有一定的特殊性。因为在她考入我的博士生之前,我所招收的博士生基本上都是毕业于国内各大学硕士研究生课程的学生。而王源就读的硕士研究生课程是日本的埼玉大学。通过招收王源进入北京日本学研究中心的博士课程,我对北京外国语大学、北京日本学研究中心的博士课程有了一个心得体会。

从改革开放以来,我们的学生呈现出了一种在国内接受基础教育,到国外留学攻读更高学位的留学潮。从刚开始的在国内读本科或硕士研究生以后,去国外上硕士课程或攻读博士学位。到后来在国内上完高中去国外上大学,甚至在国内上完初中以后就去国外上高中然后再上大学。有人开玩笑说,中国的基础教育就是在为国外培训学生。然而,随着改革开放的发展,国内近几年来教育水平的提高,相反在国外接受完一定的基础教育以后,回到国内来进一步深造的学生逐渐增多。国外来的留学生,也逐渐从原来的单一接受汉语教学的学生逐渐地来中国接受专门教育的学生也越来越多起来。正是在这样一个变化的过程中,王源也是在日本埼玉大学的硕士课程毕业以后,回到国内来进一步攻读博士学位的。从而也可以说明,我们中国国内的日语语言文学博士课程也发展到了一个可以与日本大学博士课程接轨的程度。

那么,在接受了日本硕士课程训练以后的王源身上,作为导师我看到了什么呢。我看到的是一个思维非常严谨、非常注重实证的一种学术作风。我们知道,日本的学者在学风上最看重的就是严谨和实证。这样的学风必然影响到他们的学生。王源入学以后,在学习上也继续保持了一丝不苟的作风,对于每一个细小的问题都要通过自己的实证考察和严谨的推论。正是在这样一种学风的指导下,王源才最终完成了她那篇实证性非常强的博士论文《コミュニケーションにおける中日の謝罪行動の比較(人际交流中的中日道歉行为的比较研究)》。她的博士论文现在能以这样的形式出版,我觉得是中日两国教育成果的结晶,也是中日两国教育交流的成果,我相信王源硕士阶段的指导教师,现日本明治大学的姬野伴子教授也一定会和我一样,感到无比的欣慰和高兴。

本书运用社会语言学的研究方法,旨在了解在不同文化语境下,中日言语行为背后所隐含的思维方式的差异。

人际交流是在一定的社会文化环境中进行的,因而必定要受到语境的制约和影响。语境又可分为文化语境和情景语境。前者包括社会规范、行为准则、思维方式等;后者包括具体的交际目的、参与者的社会关系、性别及年龄等因素。众所周知,在语言交际过程中出现误会或摩擦的原因往往不在于语言形式上的错误,而多是由于特定的文化语境和情景语境造成的。在跨文化交际(即两个不具有同样语言或文化背景的人之间的交际)中,由于文化语境的差异导致的误会或摩擦更为多见。因此,在跨文化交际中,双方为了能更圆满地进行交流,在掌握语言使用的同时,还必须了解双方的言语行为模式和思维方式的差异等诸多文化语境的内容。

在言语行为中,道歉是因违反了社会规范或行为准则而产生的,所以道歉言语行为反映了一定社会文化环境中的社会规范、行

为准则等文化语境。而且,道歉和赞扬等其他言语行为不同,它发生在对人的感情或人际关系已经出现问题的情况下,如果在跨文化人际交流中再出现误解或摩擦,问题将更为严重。

本书为了揭示中日言语行为模式的相同点和不同点,对中日道歉行为进行了分析和考察。在日语中,“道歉语”除了出现在道歉的场面之外,还出现在请求的场面、拒绝的场面、误会的场面、打招呼的场面和感谢的场面。进而本书除了对道歉的场面里中日典型的道歉行为的相同点和不同点进行研究考察外,还考察了在拒绝的场面和误会的场面里中日道歉言语行为的使用,从而明确了在人际交流中中日道歉行为的相同点和不同点,并通过对在人际交流中中日道歉行为的相同点和不同点的分析和考察,明确了中日人际交流行为模式的相同点和不同点。同时,本书还通过采访调查并采用 Brown and Levinson 理论,明确了中日道歉行为之间产生差异的原因,进一步阐述了中日人际交流行为背后所隐含的中日思维方式的差异。

我相信,王源在今后的日语教学中,一定能将这些研究成果渗透到她的日语教学中去,使学生在跨文化交流时避免相应的误解和摩擦,为培养跨文化交际的优秀外语人才贡献一份力量。

北京日本学研究中心主任

北京外国语大学教授、博士生导师

徐一平

2011年10月于北京

目 录

序	(1)
第1章 本書の研究の動機と目的	(1)
1. 研究の動機	(1)
2. 研究の目的	(3)
第2章 謝罪とポライトネスに関する先行研究	(5)
1. 謝罪に関する研究	(5)
1.1 発話行為論的研究	(5)
1.2 日本語の謝罪、中国語の謝罪の研究	(6)
1.3 日中の対照研究	(7)
1.4 日中以外での対照研究	(9)
1.5 その他の謝罪研究	(10)
2. ポライトネスに関する研究	(11)
2.1 ポライトネスの概念	(12)
2.2 ポライトネス・ストラテジー	(13)
第3章 コミュニケーションにおける謝罪行動の研究手法	(17)
1. データ収集方法	(17)

2. 調査の設計	(20)
2.1 質問紙調査	(20)
2.1.1 場面の設定	(20)
2.1.2 場面の順序	(24)
2.1.3 予備調査	(25)
2.1.4 質問紙調査票	(25)
2.2 面接調査	(26)
3. 調査の実施	(27)
3.1 質問紙調査の実施	(27)
3.2 面接調査の実施	(28)

第4章 コミュニケーションにおける日中の謝罪行動の

相違	(29)
----------	------

1. 謝罪の場面で日中の謝罪行動	(29)
1.1 意味公式による謝罪言語行動の分析	(30)
1.1.1 謝罪の場面における意味公式	(31)
1.1.2 意味公式の使用数	(37)
1.1.3 意味公式の使用率	(41)
1.1.4 謝罪の展開構造パターン	(56)
1.2 謝罪の場面における日中言語形式	(72)
1.2.1 待遇表現についての日中対照	(72)
1.2.2 謝罪の慣用表現における形式の選択	(74)
1.2.3 他の意味公式における言語形式	(81)
1.3 謝罪の場面における謝罪の非言語行動	(87)
1.4 謝罪の場面における日中謝罪行動の考察	(89)
2. 断りの場面で日中の謝罪行動	(93)

2.1	意味公式によるデータの分析……………	(93)
2.1.1	断りの場面における意味公式……………	(94)
2.1.2	意味公式の使用数……………	(96)
2.1.3	意味公式の使用率……………	(97)
2.1.4	＜慣用表現での謝罪＞の使用回数と使用位置……………	(102)
2.2	言語形式による日中の謝罪慣用表現の分析……………	(106)
2.3	断りの場面における非言語行動……………	(111)
2.4	断りの場面における日中謝罪行動の考察……………	(112)
3.	誤解の場面で日中の謝罪行動……………	(114)
3.1	責任の表明……………	(115)
3.1.1	日中の回答における責任の表明……………	(115)
3.1.2	男女別の責任の表明……………	(117)
3.2	誤解の場面における謝罪の慣用表現の使用……………	(119)
3.2.1	誤解の場面における謝罪の慣用表現の使用回数と 使用位置……………	(122)
3.2.2	誤解の場面における謝罪の慣用表現……………	(124)
3.3	誤解の場面における非言語行動……………	(128)
3.4	誤解の場面における日中謝罪行動の考察……………	(129)
4.	三つの場面における謝罪の相違に関する考察……………	(131)

第5章 面接調査によるデータの分析…………… (135)

1.	謝罪の場面に関する面接調査の回答の分析……………	(137)
2.	断りの場面に関する面接調査の回答の分析……………	(166)
3.	誤解の場面に関する面接調査回答の分析……………	(180)
4.	面接調査によるデータ分析の考察……………	(195)

4.1	謝罪の場面についての考察	(195)
4.1.1	日中における謝罪行動の認定について	(195)
4.1.2	日中における謝罪の慣用表現使用の意味合いについて	(196)
4.1.3	謝罪する側とされる側の立場関係について	(197)
4.2	断りの場面についての考察	(199)
4.3	誤解の場面についての考察	(200)
第6章	日中の謝罪行動と対人行動パターン	(203)
1.	日本人と中国人の謝罪行動	(203)
2.	謝罪の慣用表現の対人的な意味合い	(205)
3.	日中の対人行動パターン	(206)
第7章	異文化コミュニケーションへの提言	(213)
1.	日中のより良いコミュニケーションのための提言	(213)
2.	日本語教育への提言	(215)
2.1	謝罪の慣用表現の使い分け	(216)
2.2	謝罪行動における言語形式	(217)
2.3	謝罪の展開パターンと立場関係	(217)
3.	今後の課題	(217)
付録Ⅰ	調査票(日本版)	(219)
付録Ⅱ	調査票(中国語版)	(224)
謝 辞		(229)
参考文献		(231)

第1章 本書の研究の動機と目的

1. 研究の動機

日本語母語話者と中国語母語話者が接して、コミュニケーションを行う時、実際の言語使用の場面では様々な誤解や摩擦が起きているようである。橋元他(1992)は異なる言語圏の人間が、互いの意思疎通において不都合をきたす場合、そこには様々なレベルの原因が考えられるとしている。一つはことばの意味的側面の不理解である。しかし、それは言語の習熟によってある程度障害を乗り越えることができる。多いのは生活文化的背景の問題や価値観の相違によるケースであり、これが最も大きな課題であると橋元他(1992)では述べている。異文化において、相互がより円滑なコミュニケーションを行うためには、実際の言語使用と共に、そこに反映されている各々の文化におけるものの考え方や、行動の仕方を理解しなければならない。

私達は自分の生活する社会のルールを念頭におきながら行動している。したがって、その社会において言語行動がどのように行われているのかを考察することは、その社会のルールを探る糸口となり得る。異文化コミュニケーションにおける摩擦や誤

解を避けるためには、各々の社会における言語行動のパターンを明らかにし、そこからその基底にあるルールやものの考え方の異同を探ることが必要である。実際の生活の中では、依頼、謝罪、断り、褒めなど他者に対する様々な言語行動が行われている。その中で、謝罪という行動には社会的規範あるいは論理に照らした違反が関わっており、謝罪行動の周辺には様々な社会行動の基底にある規範や価値観などについての情報があらわれている。また、謝罪は話し手のあやまちや相手への被害などへの責任を認め、許しを乞い、それによって相手との人間関係における均衡を回復する行為である(熊谷 1993)。即ち、謝罪は褒めなどの言語行動と異なり、対人感情や人間関係の上ですでに何らかの問題が起きている状況で行われ、その上に異文化コミュニケーションにおける誤解や摩擦が絡むと、問題はさらに大きくなる。例えば、筆者の個人的な観察では、中国人が謝る時、よく弁明をするが、日本人からしてみれば、非常に言い訳がましく、本当に謝る気持ちがないようにと感じられるかもしれない。一方、日本人は自分が悪いと思っていなくても謝る表現を使う。中国人にしてみれば、何で日本人はそんなに謝ることが好きなのか、実に不誠実だと思う。このように、実際に日中において謝罪に関する摩擦は存在している。それは、日本人の考える謝罪行動と異なる形で中国人が謝罪を遂行し、またその逆のことも起こっているからではないだろうか。そうした誤解や摩擦の解決の一助とするためには、日中における謝罪行動が具体的にどのような行われているのかを調べ、そこに反映されている日中のものの考え方や行動の仕方の共通点と相違点を明らかにすることが必要とされる。

2. 研究の目的

従来の研究では、謝罪を実現する発話の用いられ方に関する研究や謝罪の慣用表現に関する研究など、一定の側面からの研究が多く、日本語母語話者と中国語母語話者を対象に謝罪行動の様々な側面を総合的に捉える研究はまだ少ない。本研究は日中の謝罪行動の展開パターンや慣用表現の用いられ方など各々の特徴を明らかにした上で、それらが相互にどのように関連しているかまで分析することで総合的に謝罪行動を捉え、日中の謝罪行動を比較対照することを第1の目的とする。

謝罪は聞き手に損害を与えたことによる不均衡の修復という機能を持ち、慣用表現を持つ一種のあいさつ行動とされることがある。日本語では、心情表明のあいさつとして「すみません」、「ごめんなさい」などのような慣用表現があり、中国語ではそれに相当する慣用表現として「对不起」「抱歉」などがある。このような謝罪表現は、実際の謝罪の場面だけではなく、相手に何かを依頼する場面や相手の意思に添えないことを表明する断りの場面、また、社交辞令として使われることもある。このような特徴を踏まえて、本研究では謝罪表現が謝罪行動以外に他の言語行動の中でどのように使われているのかを見ていく。今まで、日中の謝罪についての研究では、実際の謝罪の場面における研究が多く、コミュニケーションで日中の謝罪がどのように用いられているかはまだ明らかにされていない。本研究は日本語と中国語のそれぞれにおいて、謝罪表現がコミュニケーションでどのように用いられるのかを考察し、日中両言語の言語行動スタイル

の相違を明らかにすることを研究の第2の目的とする。

熊谷(1993)は、謝罪を研究することは謝罪という特定の言語行動についての知見だけでなく、言語コミュニケーションを用いた対人関係の維持や摩擦の回避など、即ち広義のポライトネスのありようについて有益な示唆を与えてくれると述べている。コミュニケーション行動の中で日中の謝罪遂行を分析した結果にポライトネス理論を適用し、言語行動の背後にあるものの考え方の共通点と相違点を明らかにすることが本研究の第3の目的である。

本研究の目的は以下の通りである。

- 1) 謝罪行動を謝罪の慣用表現の用いられ方や談話展開パターン、また言語形式など様々な側面から総合的に捉え、日中の謝罪行動の共通点と相違点を明らかにする。
- 2) 謝罪の慣用表現は謝罪行動以外に他の言語行動の中で使用されることもあるので、謝罪行動以外のコミュニケーションでもどのように用いられているかを考察する。また、そうした考察を通して、日中両言語の言語行動スタイルの相違を明らかにし、その背景にある日本人と中国人とのコミュニケーションパターンの共通点と相違点も明らかにする。
- 3) コミュニケーションにおける日中謝罪行動の共通点と相違点をポライトネス理論の観点から検討し、日中の背景にあるものの考え方や行動の仕方の共通点と相違点を明らかにする。

第2章 謝罪とポライトネス に関する先行研究

1. 謝罪に関する研究

1.1 発話行為論的研究

山梨(1986)は、Searle(1969)による感謝の発話行為の適切性条件をもとに、謝罪の発話行為が適切に行われるために満たすべき条件を次のように規定し、謝罪行為を特徴付けた。

1. 命題内容:P(命題内容)はx(話し手)による過去の行為
2. 準備:xは自分の行為がy(聞き手)にマイナスであると信じている
3. 誠実:xは自分の行為を悔いている
4. 本質:xの自分の行為に対するその気持ちの表出

熊取谷(1988)は、その上にさらに謝罪の適切性条件を具体的にに取り上げ、日本語の慣用的詫び表現の多くが、発話行為理論に基づく適切性条件及び発話媒介意図と関係付けられるとした。また、中田(1989)は映画・テレビドラマなどの脚本から採った用例をもとに、「陳謝の対象」を「相手の損害」、「話し手の不適当な行為」、「断りに添えて」、「依頼に添えて」、「社交辞令」、「儀礼」、「注

意喚起」、「皮肉・冗談として述べられる陳謝」という8項目に分類し、適切性条件による分析を通して謝罪と感謝の関係や使い分けの条件など論じた。

以上の先行研究では、抽象化された謝罪行為としての謝罪の性質を特徴づけている。本研究は、先行研究で述べられた謝罪の発話行為の性質を踏まえつつ、言語行動分析の観点から謝罪がコミュニケーションの中でどのように行われているのかを明らかにすることを目標とする。

1.2 日本語の謝罪、中国語の謝罪の研究

日本語の謝罪に関する研究としては、住田(1992)、田中(2000)、彭(2005)、熊谷(2008)などがある。住田(1992)は、謝罪の慣用表現について分析し、談話資料をもとに、日本語の詫びのあいさつ言葉が純粋な謝罪の場面以外でどのような場面や文脈で用いられるかを考察し、詫びのあいさつ言葉の使用状況の一端を明らかにした。田中(2000)は、若い世代の日本人を対象に、「責任がない時に謝るか」という意識調査を行い、他人に誤解されたり、間違えて文句を言われたりしたとき、若者はあまり謝らないという結果を報告するとともに、どんな時でも謝ると一般に言われている日本人にも世代による違いがあることを指摘した。彭(2005)は、日本語の謝罪行為の類型と機能について考察し、意味論と語用論の両方の立場から論じている。熊谷(2008)は、謝罪における働きかけのスタイルに関して、日本人の間には互いに自分のフェイスを危うくしてそれを相手に救ってもらうという一種の儀式的なやり取りがあると指摘している。

中国語における謝罪に関しては、彭(2003)が中国語の謝罪発

話表現を意味論的条件・語用論的条件によって「真性・明示型」、「真性・暗示型」、「擬似・明示型」、「擬似・暗示型」という四つのパターンのプロトタイプに分類している。また、謝罪行為に対する評価、プロトタイプ性に対する認識は、異なる社会の間で大きなずれが存在すると指摘している。

本研究では、これらの先行研究で明らかにされたことを踏まえ、日中の実際のデータを利用して、各々の謝罪行動の特徴やその相違を考察する。

1.3 日中の対照研究

高橋(2005a)、鄭(2006a)は、日中の謝罪行為の方略を中心に分析し、日本語話者は謝罪の慣用句による詫びの表明、中国語話者は言葉より実際の修復行動を重視する傾向が見られたと報告している。高橋(2005a)は三つの場面を設定して、記述式質問紙調査とインタビュー調査を行い、日本人はまず言葉で謝罪の意を表明することから関係修復を始めるのに対して、中国人は言葉による謝罪だけではなく、実際に行為を示して見せることで相手のより深い納得を得ようとする傾向があると論じた。鄭(2006a)は半構造的面接法と単純観察法を用い、日本語話者と中国、台湾の中国語話者における謝罪行為について考察した。そして、謝罪の適切性条件の中でも、文化によって重視する条件が異なること、中国人は謝罪の言葉より実質的な補償を問題解決の先決条件とし、言葉だけでは謝罪とは認めがたいことを報告した。

ボイクマン・宇佐美(2005)は、謝罪者側と謝罪の受け手側両方の行動を見る観点を取り入れ、ロールプレイによるデータを分析した。そして、日本語母語話者と中国語母語話者が「友人に

対して謝罪をする」という言語行動を行う際、中国人は謝罪を受ける側は直接的な非難を行い、相手の責任を追及するのに対して、謝罪する側はその非難を自己弁護などによってかわしながら問題解決交渉を進めること、一方、日本人は謝罪を受ける側は間接な方法で非難を行い、それを受けて謝罪する側は自分で自分の責任を認め、その上で問題解決交渉を行うことを指摘した。

崔(2005)は、謝罪の受け手側の観点から、詫び行為の実態について複数選択質問法によるアンケート調査を行い、日本人は詫びるという行為自体に重点を置き、決まった詫び表現形式によって誠意を示すことを評価するのに対して、中国人はそれぞれの相手や場面に応じて、相手に親しみを表すなど、積極的な表現によって相手に誠意を示すことを評価し、特定の言語表現形式にこだわることはないと論じた。

彭(1992)、李(2006)、陶(2005)は、それぞれ謝罪行為、謝罪言語表現と謝罪言語表現のコミュニケーション機能について分析し、「メンツ」に対する考え方の違いという観点から日中の謝罪の違いを探っている。彭(1992)は意識調査を通じて、語用論の原則(「質の原則」と「合意の原則」)の適用の仕方に現れた日本社会と中国社会との社会語用論的特徴を明らかにし、また、同じ条件下で、中国人は日本人と比べてより自分のメンツが脅かされることを意識し、それを守る意向がある、一方、日本人はより他者との調和を重視し、対人関係の修復に積極的であると述べた。李(2006)は、テレビドラマ・映画の映像資料を使い、日中における謝罪言語表現を比較し、日本人は親しい関係でも「慣用表現」をもって謝るのに対して中国人は親密度が高ければ高いほど、「慣用表現」を避け、間接的に謝ると報告した。陶(2005)はシナリオ